櫻井魚市場跡から飛鳥資料館をゆく

歴史探訪の会 9 月（52 回）例会は台風一過晴れとはいかず曇り空でしたが 19 名の参加で一部時間の関係でカットしましたが、飛鳥資料館に着くころに雨になりましたが無事実施できました。

案内人　郷土史研究家　入野　清
世話人　　たがかけ

1・桜井旧魚市場跡と櫻井町道路元標　桜井市本町旧伊勢街道通り

桜井市中央部には古代幹線道路であった上ツ道（上街道）が南北に走り、その東側の山麓を山辺の道、西側には中ツ道がさらにその西を平城京から藤原京に繋がる下ツ道が走っていた。これらの道路と交差して、横大路（伊勢街道）が東西に繋がっていて、桜井はこれらの道が交わる交通の要所に発達した町であった。

江戸時代の桜井村は初め旗本領、元和 2 年（1616）から幕府領、同 5 年（1619）からは伊勢藤堂藩領になった

文禄検地帳によると、はじめ伊勢街道と多武峰街道が交差する付近に人家があり、ここが市場の所在地で、後にここが宿場町の中心となり、高札場でもあった。その後伊勢街道添えに東西に人家が増え町が発展していった。津藩の記録では、万治～寛文年間（1658～73）には、町方として藩の保護が加えられた。

江戸中期になると、北方の三輪村に通じる道が開かれ町並みも北方へ延び、津藩領の桜井で28匹、丹波市（天理市）で10匹と常備馬と宿屋が定められて桜井宿は繁栄していった。寛永年間（1624～44）には西口焼けと称し、桜井の西口、融通念仏宗来迎寺付近に大火があった。また、寛文2年（1662）には235軒が火災で焼失していることから大きな町であったことが窺える。

明治初期までは、月に6度の魚市場・青物市が立ち、多くの商家・宿屋があった。後に本格的な材木の町となるまでは桜井の看板は三輪そうめんと魚市場であった。その中心が写真の碑がある本町であった。

明治時代になると、道路の改修が進み、松山衛道（国道166号線）や伊勢本街道（初瀬～榛原間）の大改修により、宇陀地方の産業開発の道が開かれた。

明治26年大阪鉄道〈JR桜井線）大和高田～桜井間、同32年奈良鉄道（現JR桜井線）京都～桜井間が開通し、桜井から奈良を経て京都へ、また王寺を経て大阪へと直結した。この鉄道の発達に伴い桜井は、吉野・宇陀地方や多武峰方面からの木材の集散地となった。地方の在郷町の一中心地にすぎなかった櫻井が、木材業が発展したことにより町も大きく飛躍した。

明治の初め三輪村におかれていた諸官庁が大正12年（1921）には桜井に移り、木材業の発展に伴い、行政・交通・産業・商業の中心は桜井になった。しかし、木材需要の減少と共に廉価な輸入外材に押され、過っての繁栄の姿は見られなく、桜井市としても新たな経済活路を開く事が肝要となってきている。

2・若櫻神社　同市大字谷

祭神は若桜部朝臣・安倍朝臣の祖神とする伊波我加利命（いはがかりのみこと）を祭神とする。

「大和志」には「在桜井谷邑・今称白山権現」とあり、「延喜式」神名帳の城上郡の若桜神社に比定される。これについては、大字池之内の稚桜神社がそれであるとの説もある。両社とも、近世には十市郡に属していた。これについて郷土史家の松本俊吉氏は次のように述べている。

「十市郡東部の郡境が東に移動して、城上郡を蚕食したことは、城上郡に属した高屋安倍神社・若桜神社・等弥神社が江戸時代に十市郡内にあったことで判る。

「延喜式」では城上郡に位置していた。阿部山（昔の磐余山）の頂上を境界に、東を城上、西を十市としていた旧郡境からすると、旧城上の大字谷に鎮座が正しく、池之内の神社は中世の郡境混乱後に生まれた新しいものと言える。」

3・山口神社　　同市大字谷

桜井市児童公園の北西約 200m に南面して鎮座する。春日造りの小さい本殿に拝殿がつく。石段を含めて社地は僅かに 168 ㎡社前に菰池がある。祭神は大山祇神。天平 2 年（730）に稲 81 束を祭神料にあてられ、貞観元年（859）1 月 27 日従五位下から正五位下に叙せられている。大和国の六山口神社（飛鳥・石寸・忍坂・長谷・畝傍・耳成）の一つである。元の社地は菰池南側の丘（字丸山）にあったといわれ、石寸山が安倍文殊の裏山から尾根続きに多武峰に連なっている山であることから、その山の口に鎮座されたものとされる。

4・土舞台　　同市阿部

桜井小学校の裏山の台地・現在同市児童公園の一角に「土舞台」の碑がある。「昭和 47 年 11 月 3 日　桜井市顕彰之建碑　保田與重郎撰文並書」とあり、次の碑文を記している。

「推古天皇 20 年百済帰化人味摩之伎楽舞を伝ふ
摂政聖徳太子此の地に其の演伎研修処を設けらる
中昔以来土舞台と称えて土人今に伝承す　我国演劇芸能第一の古跡也」これについては、「日本書紀」推古天皇 20 年（612）是年条に「百済人泉麾之、帰化せり。日く「呉に学びて、伎楽の舞を得たり」といふ。即ち櫻井に安置らしめて、少年を集へて、伎楽の舞を習わしむ。是に真野首弟子・新漢済文二の人、習ひてその舞を伝ふ。」とあるのに基いたものとみられる。その舞を習ったのが此処であることを伝える碑である。しかし、

「大日本地名辞書」では、「櫻井に安置らしめて…」の桜井は、此処ではなく豊浦寺（明日香村向原寺の前身）の桜井であるとする。

5・阿倍山城跡　　同所

案内によると、暦応 4 年（1341）に、南朝方の西阿が籠る戒重城を攻めるため、北朝方の細川顕氏らが陣を構えたという。のち、永禄 8 年（1565）に、松永久秀が布陣したとい

う。小規模な曲輪跡が残る。この南側は、小字名士舞台で、聖徳太子が少年を集め、伎楽を伝習させた土舞台跡とみなし、顕彰碑を建て、桜井公園として整備している。

6・艸墓古墳（カラト古墳）　同市大字谷小字カラト

安倍山城跡から東南へ500m程行った住宅地の中にこの古墳がある。南北28m・東西22m・高さ7mの裁頭方錐形（墳長部分が平坦）の方墳。埴輪は認められないが葺石は見つかっている。南東方向に開口の横穴式石室を築く。封土の基底部面の略中央に玄室があり、羨道がつく。玄室の長さ約4・5m・幅約2・8m・高さ約2m。奥壁は一石、西側壁は各2石で一段。天井は二石で、総て花崗岩の巨石を用いている。羨道は、長さ約8・8m、幅約2m、現高約1・5mで、巨石の一段上に天井石4石を載せている。間隙には三角形の小石をはめ、漆喰を施している。玄室には凝灰岩製の刳抜式家形石棺が残る。前後に一対、左右に二対の四角い縄掛突起の付く家形の蓋石と、箱形の内部を深さ50cm程刳り抜いた棺身である。

棺身の長さ2・15m・幅1・25m・高さ1m。蓋は長さ2・3m・幅1・45mで、棺身より大きく、高さ約0・6mで内部は浅く掘り込んでいる。

石棺の前に、一枚の平石がおかれている。礼拝石か、墓碑を載せる台かはっきりしない。副葬品がなく築造時期の決め手を欠くが石室構造などから7世紀前半頃のものと推定されている。国史跡

7・文殊院東古墳　　同市大字阿部

文殊院の敷地に入り、墓地を越えて10m程行くと左の山際にこの古墳がある。同境内にある二基の古墳の内東にあるもので、古くから関伽井窟と呼ばれている。東西に延びる丘陵の南斜面に築かれた直径10m程の円墳と考えられる。

南に開口の両袖式石室をもつが、羨道部の前方部が壊されている。

玄室は、長さ4・8m・幅2・2m・高さ2・4m。奥壁は巨石を二段積にし、側室は、下段に巨石を三石並べ、二段積みにしている。羨道部は5・5m分残る。

幅 1・8m、高さ 1・7m あり、右側壁は表面を磨いた石を用い、左側壁にも三石見ることが出来る。玄室より羨道部の方が加工された石を用いており、特異な例と言える。天井石も玄室には二石あり、羨道側の残っている二石の方がはるかに大きい。出土品は全く知られず、築造時期の推定は難しいが、石材や構築方法などから七世紀初頭以降、七世紀前半までの古墳とみられる。県史跡

8・白山堂　　同所

文殊院境内の東端鎮守の白山神社本殿がある。白山堂と称し、一間社流造・向拝唐破風付柿葺（こけらぶ）きで、室町末期の建築。国重文
堂内には板仏が納められている。白山神社は、全国に多く石川県の白山に白山七社があり、白山頂の白山比咩神社を本宮とする。祭神は社により異なるが、文殊院の白山神社の祭神は菊理姫命（くくりひめのみこと）である。

9・保田與重郎先生景仰碑　　同所

白山堂の南側に合格門があり、そこを潜って石段を登るとすぐ左側にこの碑がある。
先生は、明治 43 年 4 月桜井市生まれ、畝傍中学から大阪高等学校を経て東京帝国大学に在学中から芸文の才能を発揮し、「同人誌コギト」を創刊、盛んに文筆活動を行う。卒業後、亀井勝一郎らと「日本浪漫派」を創刊、その中心として活動し、文学界に日本浪漫派の中核をなし、一時代を築いた。
昭和 11 年（1936）、処女出版「日本の橋」で池谷信三郎賞を受賞して地位を確立、以後「戴冠詩人の第一人者」、「後鳥羽院」等を著し伝統主義、反近代主義、反進歩主義、アジア主義の色調を強めて行った。
時は、大東亜戦争に突入する時期で、新しいロマンチシズムを打ち立てようとする保田の日本古典文学、古美術への関心への結びつき、日本精神の再検討、復活、そして日本主義の傾向は保田を時代の立役者に仕立て上げた。

終戦後、彼は公職追放に処せられ、文壇から最も悪質な右翼文士として葬られ、不遇の時期を郷里で送るが、この間も「祖国」を創刊、匿名で時評文を書き「絶対平和論」、「日本に祈る」などで戦前からの思想の一貫性を守り通した。その表れとして大和桜井を中心として史跡の撰文、歌碑揮毫を残している。

10・ウォーナー博士報恩感謝碑　　同所

保田與重郎碑の石段を 10m 程登りきると右側にこの碑がある。案内板は次のように記している。

「ウォーナー博士は、1881 年（明治 14）アメリカのニューイングランドに生まれ、ハーバード大学出身の東洋芸術史家で日本美術の偉大なる権威者です。第二次世界大戦において、日米の風雲急なるやその親友ハル国務長官を訪ねて戦争防止をされました。不幸開戦となるや、アメリカの政府と軍の上層部に辛抱強く奈良と京都をはじめとする古都の文化的価値の説得に成功された。おかげで、アメリカ軍の日本本土空襲の時にも空爆リストから外されました。この地に建つウォーナー報恩塔はこのウォーナー博士の功績に大変感動した桜井市の一市民であった中川伊太郎さんが、日本人が博士へ寄せる感謝の気持ちを永久に残したいという気持ちから自費で建立されました。因みに中川さんは当時、失業対策事業で働く日雇い労務者という大変若しい生活を送っていたのにも拘らず、こつこつと貯えた 10 万円の全財産を出して昭和 34 年 5 月に建立されたものです。この建立の相談を受けた当時の市長及び桜井市仏教協会と当山住職はこの美徳を称えたいとの思いから場所の提供をはじめとして毎年 6 月 9 日のウォーナー博士の命日に報恩感謝の供養を厳修することとし、爾来桜井仏教協会主催によって 6 月 9 日の博士の命日に法要がおこなわれています。

11・文殊院西古墳（鹿掛け不動安置）　同所

文殊院本堂に近い古墳で、古く室町時代には開口していたことが「実隆公記」で知られている。我が国の横穴式石室の中で最も精巧に出来た切り石造りの石室をもつもので有名である。国特別史跡玄室は長さ 5・1m、幅 2・85m、高さ 2・7m・高さ約 0・6m、幅 0・7m 前後の花崗岩の長方形の切石を 5 段に積んでいる。天井石は 1 石・羨道は左右各 4 石の巨石を並べ、天

井石は3石・長さ7・3m、幅2・3m、高さ1・8m丁寧に磨かれた切石を規則正しく積み上げ、整理よく仕上げた石室は横穴式石室構築術の粋が結集されていると言える。石積の細やかな配慮としては、玄室の空間を広く見せる為に天井石の中央を彫りくぼめ、側壁を心持ち胴張りに積んでいることや、互いの目積みの側壁の石材が整然と見えるように、左右それぞれ二つの石材に細い縦線を刻んで同じ大きさの石材を積んだように見せている点等が上げられる。

玄室には弘法大師お手作りと伝う平安時代の「願掛け不動」が祀ってある。被葬者としては、大化5年〈649〉に死亡した左大臣阿部倉橋麻呂公の墓と伝えられている。

12・阿倍仲麻呂望郷の詩　　同所

西古墳の南側池を背にして此の碑がある。詩は安倍仲麻呂が帰国中乗り込んだ船が難破し、漂う海上から大和の方角を見つめて詠ったといわれる望郷の短歌である。

「天の原　振りさけ見れば　春日なる　三笠の山に　出でし月かも」

碑文には平城遷都1300年祭を記念し、奈良時代に当山出生の阿倍仲麻呂公の望郷詩碑を書家榊獲山師の揮毫により仲麻呂堂前に建立す。

因みに阿倍仲麻呂公は奈良時代を代表する文人の一人にして、遣唐留学生として渡唐し、唐朝廷において日本人初となる重職を歴任、今尚両国において日中友好の礎と仰がれる。

この望郷詩は仲麻呂公帰郷の折中国蘇州の港にて詠まれた有名な詩と伝えられる。平成22年1月吉日建立

またこの碑の北側に仲麻呂望郷しだれ桜の碑もある。

13・文殊院本堂と万葉歌碑　同所－

阿部文殊院は、阿部山崇敬寺文殊院と号し、華厳宗の日本三大文殊第一の霊場である。本州三大文殊といわれるのは、京都府宮津市天橋立　天橋立山智恩寺・山形県東置賜郡高畑町　松高山大聖寺と桜井市の安倍文殊院のことである。創建当時の事は不明であるが、「東大寺要録」巻第六、末寺章に「崇敬寺（字阿部寺）右、阿部倉橋大臣之建立」とあり、阿部氏の氏寺として建てられ、東大寺の末寺であったと考えられる。

本堂は（文殊堂）寛文 5 年（1665）の再建。庫裡は、もと大字三輪の大御輪寺の書院を移築した桃山時代の遺構で市文化財。そこに札堂（能楽堂）が付き、寛文 5 年〈1665）の建立。大師堂・本坊・方丈・客殿などもある。本坊は室町時代で県文化財。絵画板壁 2 枚があり、市文化財。

本尊は文殊菩薩騎獅像で、本尊に向かって右後ろに手綱を取る優填王（うてんおう）像、同じく右前に善財童子像、本尊に向かって左前に須菩提像（仏陀波利三蔵）、左後ろに唯摩居士像（最勝老人）の四躯が脇侍となっている。唯摩居士像は桃山時代初期（天正 8 年頃）の補作である。獅子も同じ年の補作であるが、たくましい脚の表現等が優れ、国重文である。本尊と優填王像・善財童子像・須菩提像は、文殊頭部内の墨書銘で建仁 3 年（1203）工匠安阿弥陀仏（快慶）の作となる国重文である。また、銘文中にある約 50 名の結縁者名の中に「南阿弥陀仏」（重源）・「行阿弥陀仏」・「金阿弥陀仏」・「豪覚」・「大江良信」など、他の快慶作品にも結縁者として名を連ねる人たちが多い。重源を中心とする信仰集団と仏師快慶との結びつきを示す貴重な史料である。

文殊騎獅像は木彫極彩色で高さ 7m あり、日本最大・文殊像の坐高は 2m である。桧の寄木作り、彫眼。著しく高い髷を結う。肉身部は粉溜、衣部は極彩色を施してある。右手に降魔の利剣を、左手に蓮華を持つ。明治 24 年（1891）頃、文殊菩薩内から経巻が発見され、その奥書に空阿弥陀仏〈明遍）が、その甥にあたる同門の慧敏の造立になる本像に奉籠するために承久 2 年〈1220）に書写したとある。これは建仁 3 年（1203）からかなり遅い承久のころに造立供養したことを示す。外に、木造大日如来坐像（平安中期）・木造釈迦三尊像（室町初期）は市文化財。　文殊院建物の南西角に万葉集歌碑がある。

　つねさはふ　磐余も過ぎず　泊瀬山　いつかも越えむ　夜は更けにつつ　巻三　282

春日蔵首老揮竜は　ノーベル物理学賞　　朝永振一郎

14・史跡安倍寺跡　′　同市大字阿部

文殊院の西南約 300ｍの所にあり、文殊院の前身、崇敬寺（安倍寺）の旧寺地と考えられ、国史跡となった。現在史跡公園。南北 100m 東西 92 血の、道路に囲まれた一角にある。

西辺中央部に「仲麻呂屋敷」と呼ばれる一辺 11m のほぼ正方形の土壇があって、ここが塔跡とされる。その約 38m 東方に金堂跡の土壇が残る。塔と金堂の北方に講堂跡が推定される。塔と金堂を囲む東西 94m・南

北 56m の回廊の遺構も確認されている。中門・南大門・僧房等の跡は明らかではない。法隆寺式伽藍配置と推定されるが、南門や寺の南限を区画する溝・築地などの遺構は検出されず、南面する寺であったかもはっきりしていない。その中にも、創建からは廃絶までの間に使用されていた瓦を始め、塼仏・蝶髪・壁土・陶磁器・蓮弁型土製品・土師器・須恵器などの出土があった。中でも塼仏は、同じ形式のものとしては法隆寺・唐招提寺・興福寺・当麻寺・藤原宮・夏見廃寺・藤井有鄰館
蔵品に続く全国でも八例目となる貴重な史料である。また、講堂跡とされる基壇に文殊院の瓦窯が五基検出されている。

15・吉備春日神社　　同市吉備町

史跡安倍寺跡から西北に約 2km 行くと吉備津池の北側にこの神社がある。

御祭神　　磐座　大津皇子
武嚢槌命
経津主命
天児屋根命
姫大神
天武天皇

この一帯は、古代から磐余池の辺に 4 つの宮殿があったとされている。
「磐余」とは桜井市西部から橿原市東部にかけての古代の地名で、桜井の寺川西部で天香具山の西辺りまでの範囲であったと見られている。その中に
磐余池があったと考えられている。
宮殿は、第 17 代履中天皇の稚桜(わかざくら)宮、第 22 代清寧天皇の甕栗(みかくり)宮、第 26 代継体天皇の玉穂宮そして聖徳太子の父親の第 31 代用明天皇池辺双槻(いけべなみつきのみや)宮である。

稚櫻宮は桜井市池之内の稚櫻神社に、池辺双槻宮は同市吉備の春日神社にあったとされる伝承が残されているが、これら 4 つの宮の所在については、文献史学、考古学、地理学上から様々な探究がなされているが、まだ明らかにされていない。

●神武天皇聖蹟顕彰碑　紀元 2600 年（昭和 15）奉祝の事業として、当時の文部省の肝いりで、神武天皇所縁（ゆかり）の地に建てられた碑である。「紀元二千六百年奉祝会」が文部省に委嘱し、「神武天皇聖蹟調査委員会」による推考・答申に基づいて選定され、全国に 19 カ所、その内奈良県内で 7 カ所が建っている。

1・神武天皇遺蹟菟田穿邑（うたのうがちのむら）顕彰碑　宇陀市菟田野宇賀志八坂神社（村社）の近く

2・菟田高倉山顕彰碑　宇陀市大宇陀守道　高倉山頂　額彰碑の裏面には「神武天皇戊午年 9 月菟田高倉の頂きに登り給いて域中の慮軍〈敵軍〉の形勢を瞻望し給えり聖蹟はこの地なりと伝えられる」

3・丹生川上顕彰碑　東吉野村（丹生川上神社中社摂社丹生神社北側）

4・磐余邑（いわれむら）顕彰碑　桜井市吉備（春日神社北側）

5・神武天皇聖蹟鵄邑（とびむら）顕彰碑　生駒市上町　出垣内バス停東南の丘（県立奈良北高の北側）

6・狭井河之上（さいがわのほとり）顕彰碑　桜井市茅原（狭井神社の北）

7・鳥見山中霊畤（まつりのにわ）顕彰碑　桜井市（等弥神社の南側）

16・吉備池と万葉歌碑　同所

吉備春日神社の 100m 程南に吉備池がある。百済寺があったとされる所である。この池の北西角と西中央に万葉歌碑がある。ここから西の方角を仰ぎ見ると秀麗な二上山の雄嶽、雌嶽の姿が鮮明に見える。右側の少し高い雄嶽山頂に大津皇子が眠っている。写真左の皇子の歌「ももつたふ　磐余の池に　鳴く鴨を　今日のみみてや雲かくりなむ」大津皇子は、天武天皇が朱鳥元年（686）9 月 9 日に崩御され、誄をされている前後に、抜け出し、伊勢の斎宮に仕える実姉大来皇女に会いに行った。これが素で大津皇子は全くの無実なのであるが、謀

叛の廉があるとして捕らわれの身となってしまった。これを密告したのが仲の良かった川島皇子（天智天皇と宮人忍海造色夫古娘との皇子）であったという。同年 10 月 2 日に謀反が発覚したとして一味 30 人と共に捕縛された。翌 3 日、訳語田の家で死を宣告された。大津皇子 24 歳であった。その刑場へ皇子が向かう時に詠われたのが写真左の歌碑である。またこの時「懐風藻」に漢詩も残されている。

「ももつたふ　磐余の池に　鳴く鴨を　今日のみみてや　雲がくれなむ」

万葉集巻三　416　漢詩　「金烏臨西舎　鼓声催短命　泉路無寶主　此夕離家向」懐風藻

大来皇女の短歌

「親身の　人なる吾や　明日よりは　二上山を　弟背と吾が見む」　万葉集巻二 165

大来皇女が天武天皇崩御後、明日香に来て誄中に摩念の死を遂げられ、二上山に葬られた時、弟以上に情愛を寄せていた大津皇子に姉として全身の鎮魂を込めて歌われたものである。

17・稚櫻神社　同市大字池之内

吉備池から南へ 2km 程池之内集落を抜けていくと右側に小高い台地に出る。台地沿いに 200m 程廻と写真の鳥居前に出る。

履中天皇の磐余稚櫻官跡と伝えられている所である。「延書式」神名帳に出てくる城上郡の「若桜神社」とする説もあるが、池之内が延喜年間（901～23 年）に城上郡に属していたか疑問が残る。

祭神は気息足姫命（神功皇后）・出雲色男命〈鐃速日命三世の孫・物部長真の祖）・去来穂別命（履中天皇）。宝暦 9 年〈1759）の藤堂藩領桜井組神社改帳によると、「天満宮」と称したとある。

本殿前に「雷おえの石」と呼ぶ径 0・6m の石がある。凝灰岩に簡素な六葉単弁蓮華文が刻まれていて、六角形石灯籠の中台で、平安時代を下らないと推定されている。

18・史跡山田寺跡　同市大字山田

稚櫻神社から東南へ約 3km 行くと旧山田道通りの東側に山田寺跡がある。法相宗で、浄土寺・華厳寺とも称し、大化山と号す。長谷寺式十一観音を本尊とする。国特別史跡。写真右より、中門・塔・金堂・左に講堂。山田寺は、大化改新の功労者の一人蘇我山田石川麻呂が発願した飛鳥時代を代表する寺院の一つである。記録によると 641 年（皇極元年）に着工し 2 年後には金堂が完成したが、649 年（大化 5）に石川麻呂が政争に巻き込まれ、自殺したため造営は中断した。その後、本格的に中大兄皇子により再開され、676 年（天武 5）に塔が完成、同 6 年（677）に丈六仏像を鋳、同 13 年に開眼し、これを山田寺と称したとい

う。同 14 年 8 月 12 日には浄土寺行幸があり、文武天皇 3 年（699）6 月 15 日には、山田寺に封 300 戸が施入されている。
平安時代の治安 3 年（1023）に、関白藤原道長が吉野へ行く途中ここに立ち寄り、堂宇の荘厳さに驚いたと伝える。講堂の本尊であった丈六仏像が、文治 3 年（1187）3 月に、興福寺東金堂衆のために強奪され、以後同堂の本尊となっていたが、応永 18 年（1411）同堂が焼け、頭部だけが焼け残った。白鳳時代は国宝 12 世紀中ごろに塔、金堂が焼失し、平安時代以降は衰微していった。

写真イラストで見るように境内には、往時の伽藍配置遺構がかなりはっきりと残している。門・塔・金堂・講堂が南から北に直線状に並ぶ四天王寺式で寺域は、東西 119m・南北 185m。塔跡は、一辺 12m 四方の土壇で、四周の中央に幅 3m の階段があり、周囲に犬走りがめぐっていた。心礎と西北の四天柱が原位置を留めていたが、心礎南側に近世の盗掘穴があった。心礎は南北径 1・72m、中央上部に二段の舎利孔を穿っている。径は 0・3m。心礎の下面にも径 1m の円柱座があった。塔周辺に瓦敷を施し、瓦と共に塼仏が多数出土した。

金堂の発掘では、東西 21・6m、南北 18・3m の基壇と、その周りに約 1・6m の幅で犬走りがあった。
金堂平面は、桁行 3 間、梁間 2 間の母屋に庇がつく形式であった。講堂は正面 8 間、側面 4 間。基壇の東半部は削られているが、西半部に礎石・地覆石が残り、建物の扉の付き方が分かる。

回廊は、中門から出て塔・金堂を囲み、講堂にはつかず、ここが四天王寺式伽藍配置と異なっている。
金堂・回廊の礎石には蓮華文を浮き彫りにした連座がある。昭和 57 年（1982）に、土石流によって倒潰し、埋没したままの東回路が見つかり、それ以後の調査によって平成 8 年（1996）には南回廊も見つかり、廻廊遺構の全貌が明らかになってきている。従来最古とされた法隆寺より半世糸己古い木造建築として注目された。

南門は、三つ扉の古代寺院としては類例のないものといわれている。

●蘇我山田石川麻呂を密告したのは誰

649 年（大化 5）3 月 24 日、中大兄皇子に向かい、ひそかにこう告げた者がいる。「私の異母兄に当る麻呂は、近々皇太子が海辺に行かれる機会をねらって、反逆の挙に出る企てをしています。」この密告者は蘇我日向であった。麻呂とは日向の長兄になる蘇我倉山田石川麻呂のことで、蘇我入鹿亡き後の蘇我氏の実権者、石川麻呂の横死事件はこうして起きた。石川麻呂は中大兄皇子にわが娘遠智姫をとつがせ、すでに大田皇女、鸕野皇女、建皇子が生まれていた。次第に皇族との結びで権勢を増してきた石川麻呂の存在は、皇族との姻戚関を持っていなかった藤原鎌足にとって最も恐れる政治勢力であった。また、蘇我氏の内部でも、各家が独立し、同族間の対立が次第に増し、石川麻呂と日向とはいつも対立していた。日向の密告は私怨であるとも考えられるが、鎌足にとっては石川麻呂を潰す絶好の機会となった。

19・東大谷日女命神社（やまとおおたにひめみことじんじゃ）　岡市大字山田

山田寺跡の南に鎮座する神社で、祭神は東大谷姫命。社記では稚姫命のこととし、「五群神社記」が引用する「忌部氏記録」には、稚日女命は朝日豊明姫命の隠語と記している。

「東大谷…」の東は「夜末止（やまと）」と訓ずべきであるとし、東大谷姫神社は東漢氏の祀ったものと解する。当社は、その位置から見て山田寺の鎮守社と推定される。

境内に永和元年（1375）の神前型石灯籠がある。もとは山田寺境内にあったと伝える。

石灯籠は花崗岩製・四角型・高さ 2・02m・基礎側面無地、上端複弁反花・中台下端覆輪付き単弁・側面三区に花菱文様、火袋側面蓮華座上月輪を浮き彫りし、下区二区に斜め十字、上区に横連子、笠軒厚みは薄く、水平に延びて両端で反る。技巧は繊細で、神社燈籠にふさわしく清楚に造られている。名工伊行長の作である。

竿一面の上部に四言八句の讃文を、下部に年号、勧進・石工名をきざんでいる。

善哉燈籠　　微妙光明　　勧進　　行念
帰功於本　　施得於霊　　永和元年乙卯 8 月 1 日造立之
無間涅滅　　有漏水清　　大工　　行長
願我一念　　利他衆生

20・飛鳥資料館・明日香村奥山　石造の色々

●飛鳥資料館は、1970 年（昭和 45）12 月 18 日の閣議において飛鳥地域の出土品保管する為の施設の建設が決定され、谷口吉郎設計による数寄屋風のコンクリート建築で資料館が建てられ、1975 年（昭和 50）3 月 16 日に開館した。飛鳥時代における倭国の中心であった飛鳥地域で発掘された出土品を展示・飛鳥地域の研究の最新情報を提供している。

写真の多くは下見時の写真を使用しています。